

今さらの「」対面

九九六（長徳二）年四月、花山法皇への不敬などにより、藤原伊周・隆家兄弟は失脚し、伊周は筑前の国の大宰府（現在の福岡県太宰府市）に、隆家は出雲の国（現在の島根県東部）に配流されることが決まった。その後、朝廷からの命により、伊周は播磨の国（現在の兵庫県西南部）、隆家は但馬の国（現在の兵庫県北部）に留め置かれていた。

はかなく秋にもなりぬれば、世の中いとどあはれに、萩吹く風の音も、遠きほどの御けはひのそよめきに思しよそへられけり。

播磨よりも但馬よりも、日々に人参り通ふ。北の方の御心地いやまさりに重りにければ、ことごとなし、「帥殿今一度見奉りて死なむ、帥殿今一度見奉りて死なむ。」といふことを、寝ても覚めてものたまへば、宮の御前もいみじう心苦しきことに思し召し、この御はらからの主たちも、いかなるべきことにかと思ひまはせど、なほいと恐ろし。北の方は切に泣き恋ひ奉り給ふ。見聞き奉る人々も、やすからず思ひ聞こえたり。

播磨にはかくと聞き給ひて、いかにすべきことにかはあらむ、事の聞こえあらば、わが身こそはいよいよ不用の者になりはてて、都を見でやみなめなど、よろづに思しつづけて、ただとかくに御涙のみぞ隙なきや。さはれ、この身はまたはいかがはならむとする、これにまさるやうはと、思しなりて、親の限りにおはせむ見奉りたりとて、公もいとど罪せさせ給ひ、神仏も憎ませ給はば、なほさるべきなめりとこそは思はめと、思したちて、夜を昼にて上り給ふ。

さて宮の内には事の聞こえあるべければ、この西の京に西院といふ所に、いみじう忍びて夜中におはしたれば、上も宮もいと忍びてそこにおはしましあひたり。この西院も、殿のおはしまししをり、この北の方のかやうの所をわざと尋ねかへりみさせ給ひしかば、そのをりの御心ばへどもに思ひて、洩らすまじき所を思しよりたりけり。母北の方も、宮の御前も、御方々も、殿も見奉りかはさせ給ひて、また今さらのご対面の喜びの御涙も、いとおどろおどろしういみじ。上はかしこく御車に乗せ奉りて、おましながらかきおろし奉りける。いと不覚になりける御心地なりけれど、よろづ騒がしう泣く泣く聞こえ給ひて、「今は心やすく死にもし侍るべきかな。」と、喜び聞こえ給ふも、いかでかはおろかに、あはれに悲しとも世の常なりや。

【口語訳】

無常のうちには秋になったので、世の中はいっそうしみじみと趣深く、萩の葉に吹く風の音も、遠い配流の地にいる人の気配の、ひそやかな物音に重ねられて偲びなさるのであった。

播磨の国からも但馬の国からも、日々に使者が参上し通っている。北の方（＝高階貴子）の病状は一段と重くなったので、他のことは何もなくて、「帥殿（＝藤原伊周）に今一度お会いして死にたい、帥殿に今一度お会いして死にたい。」ということも寝ても覚めてもおっしゃるので、宮の御前（＝中宮定子）もたいそうおいたわしいこととお思いになり、北の方のご兄弟の方々も、どうしたらよいのかと思いまどうけれど、やはりまことに恐ろしい。北の方は、ひたすらに泣いて（帥殿を）恋いしがり申し上げなさる。（そうした姿を）見聞き申し上げる人々も、不安にお思い申し上げていた。

播磨の国では（帥殿が）このように（母が言っている）とお聞きになって、いったいどうしたらよいのだろうか、（再会のための）帰京のことが知れたら、我が身はいよいよ役に立たない者になり果てて、都を見ることなく終わってしまうだろうなどと、さまざまに思い続けなさって、ただあれこれと涙ばかりがひっきりなしに流れるのであったよ。どうにもなれ、この身はいまさらどうなるというのか、この状況に勝る不幸はあるまいとお思いになるようになって、親の臨終でいらっしゃるのをお見舞い申し上げたといって、朝廷もいっそう重く罰しなさり、神仏も憎みなさるとしたら、それもやはり前世からの宿縁のようだと思うことにしようと思ひなさって、昼夜兼行で上京なさる。

さて中宮定子の御所の中では事が漏れるかもしれないので、この西の京にある西院という所に、たいそう忍んで夜中にいらしたところ、北の方も中宮もたいそう忍んでそこにいらっしゃったのだった。この西院も、殿（＝道隆）が生きていらしたとき、この北の方がこのような所（の主人）に対して特に大切に目をかけておやりになったので、その折の恩義を思つて外に漏らすはずがない所を思いつきになったのだった。母北の方も、中宮も、その他の方々も、殿（＝伊周）も互いに顔を合わせ申し上げなさって、また今さらながらのご対面の喜びの涙も、大変仰々しく激しいものだった。北の方をうまく車にお乗せ申し上げて、御座台のまま車から降ろし申し上げた。ひどく前後不覚になったご様子だったけれど、さまざま騒がしく泣きながら申し上げなさって、「今は安心して死んでいくことができますなあ。」と喜びながら申し上げなさるのも、どうして通り一遍であろうか、しみじみ悲しいという言い方はありきたりすぎるくらいであるよ。